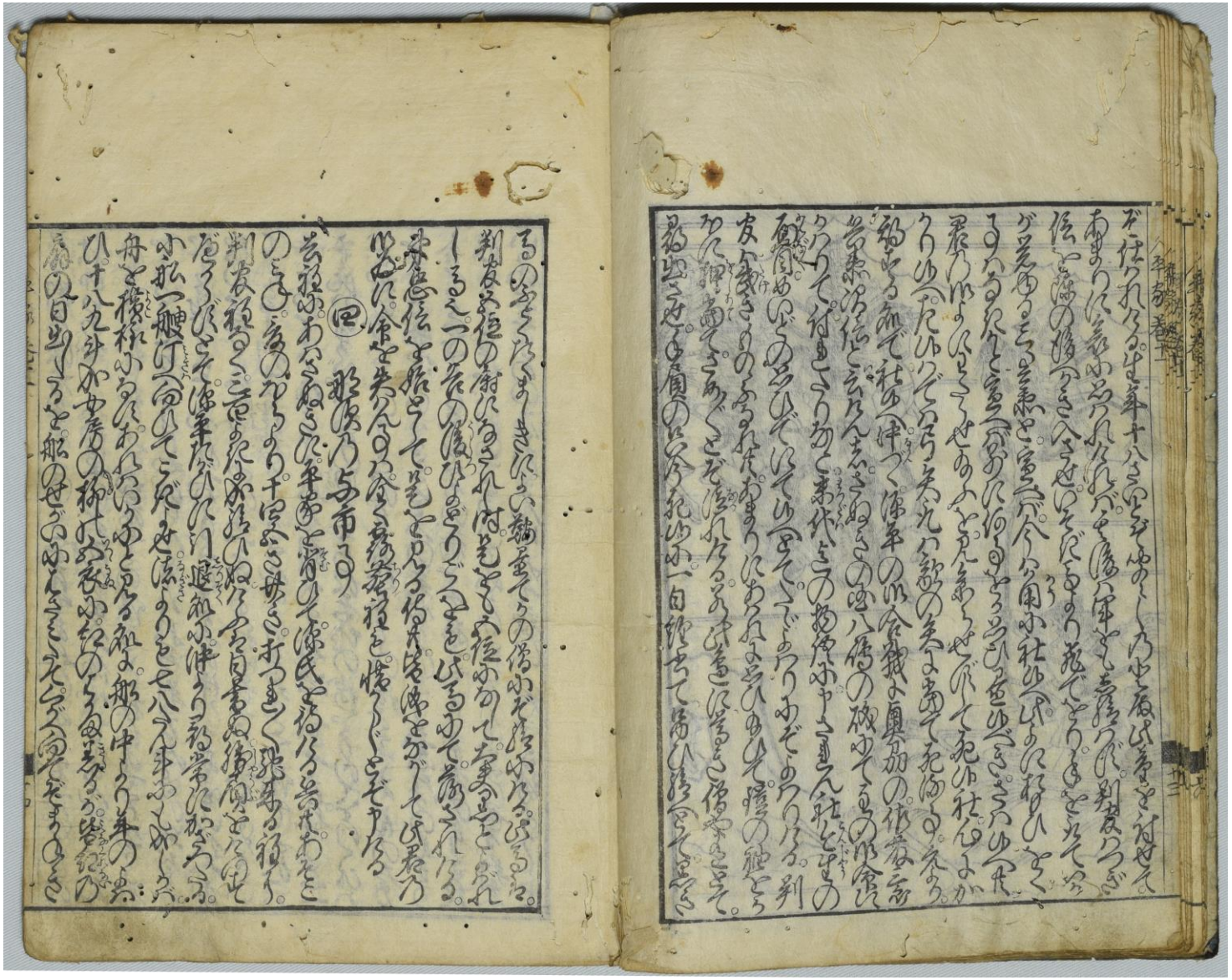
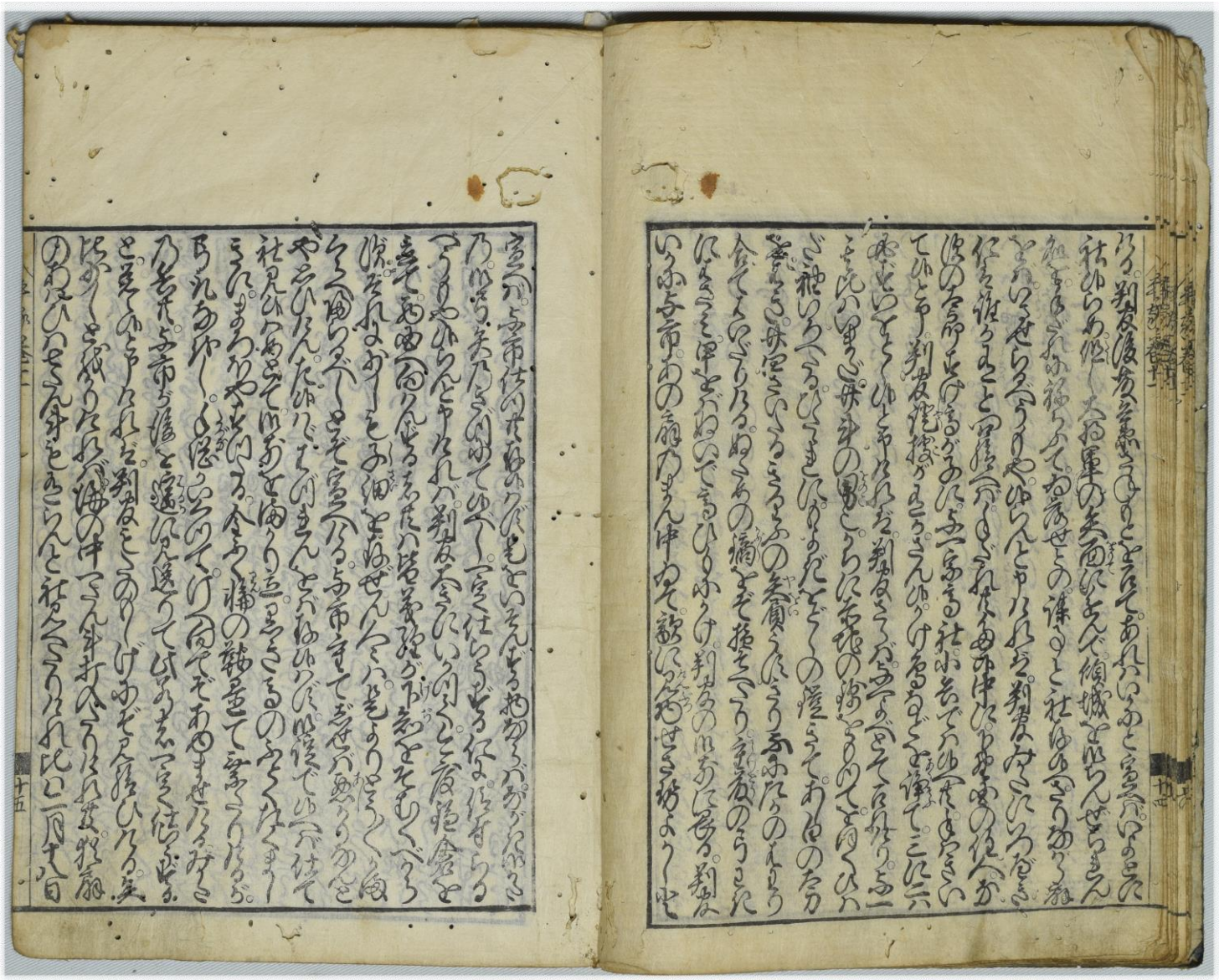
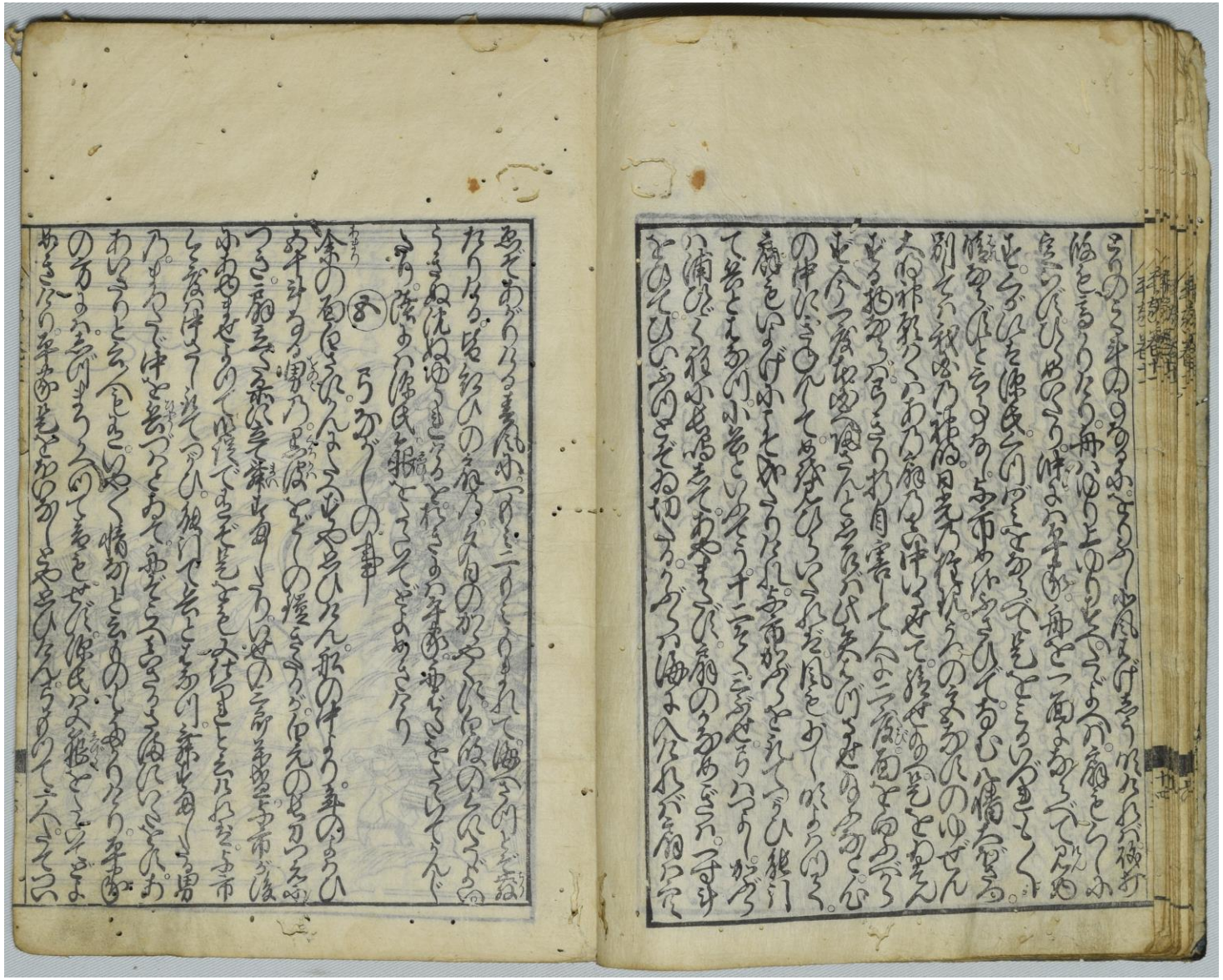
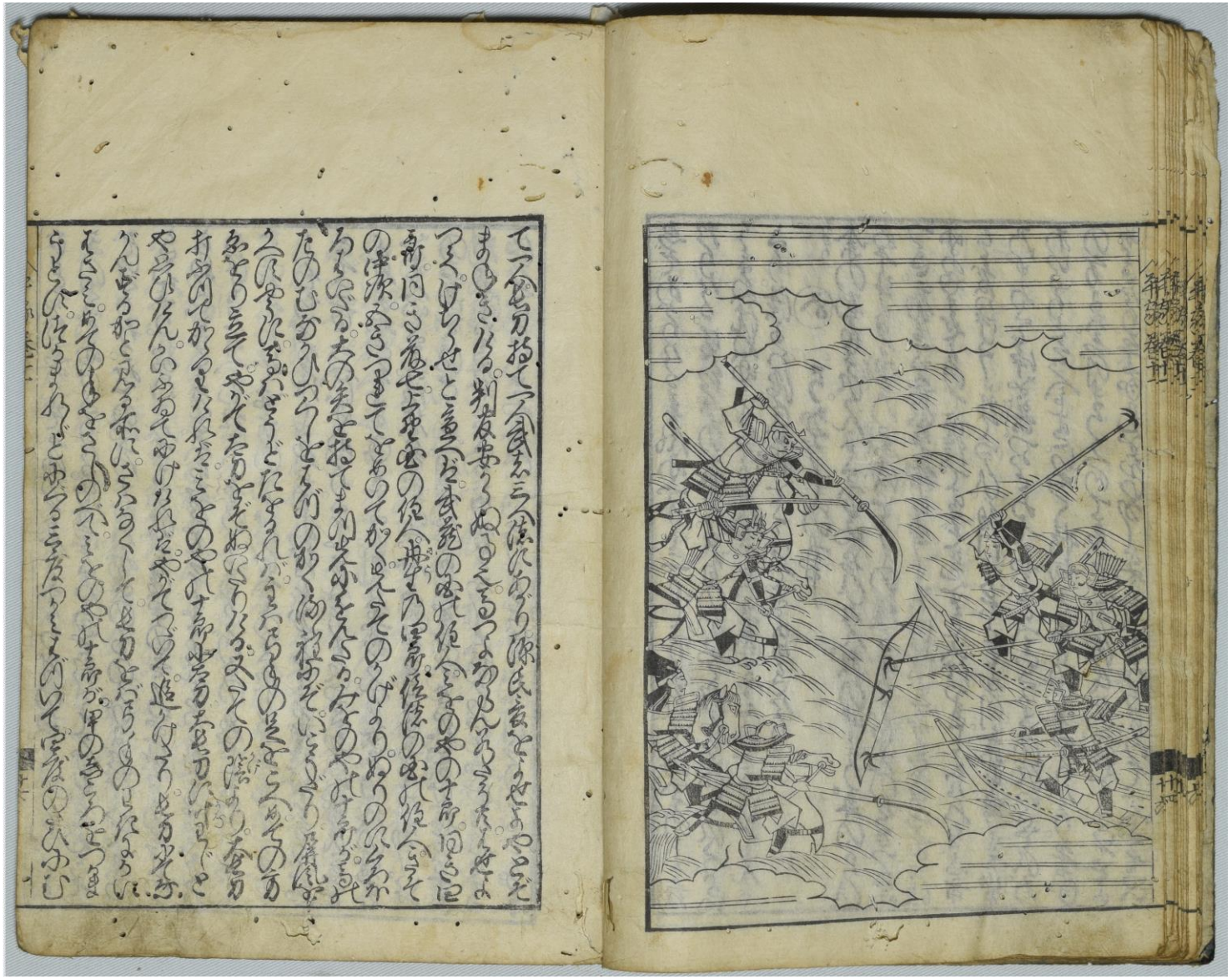
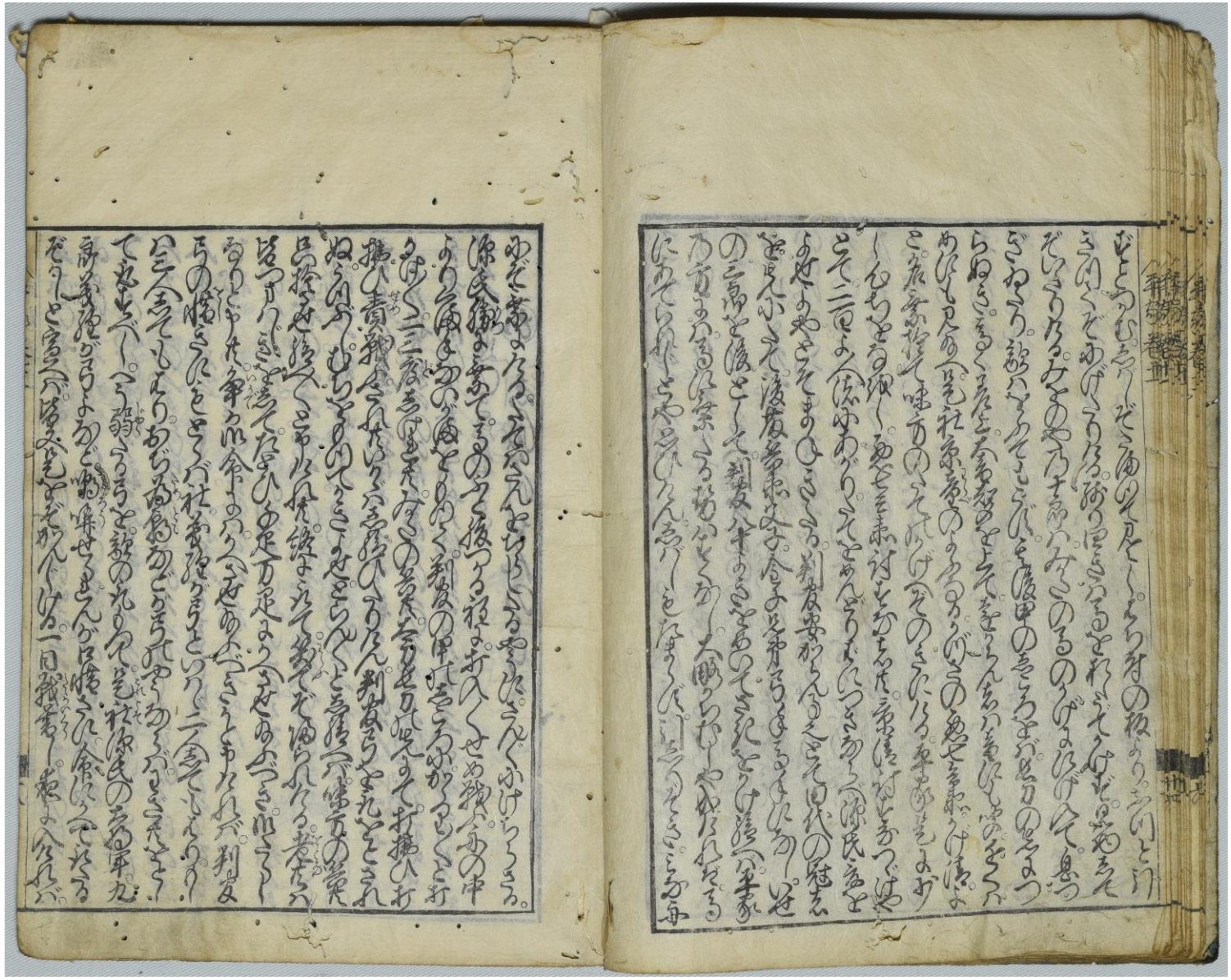
【資料名】平家物語　巻第十一（三野郡中ノ村大矢家文書２８８―３１６）











デジタル資料室　平家物語（後編）

デジタル資料室　平家物語（後編）

【解説】

前回に引き続き、平家物語の中の屋島の戦いの後半部分――那須与一の活躍、弓流しの逸話、志度合戦の顛末までを読んでいく。

読点に「。」を使用しているが原文ママである。ひらがなが多く区切りが分かりづらい傾向はあるが、読むのは易いので、くずし字読解に興味のある方はぜひ挑戦していただきたい。

【翻刻】

〈1―左〉

四　那須乃与市事

去程に。あハさぬきに。平家を背ひて。源氏を待ける兵共。あそこのミね。処のほらより。十四五き廿き。打つれ〳〵馳来る程に。判官程なく。三百よきに成給ひぬ。けふは日暮ぬ。勝負をけつすべからずとて。源平たがひに引退処に。沖より尋常にかざつたる。小船一艘汀へ向ひてこぎよせ。渚よりも七八たん斗にも成しかバ。舟を横様になす。あれハいかにと見る処に。船の中より年のよハひ。十八九斗成女房の柳の五衣に。紅のはかま着るが。皆紅の扇の日出したるを。船のせがいにはさミたて。くがへ向てぞまねき

〈2―右〉

ける。判官後藤兵衛さねもとを召て。あれハいかにと宣へバ。いよとに社候らめ。但し大将軍の矢面に進んで。傾城を御らんぜられん処を。手だれにねらふて。ゐ落せとの。謀事と社存候へ。さりながら扇をバ。いさせらるべうもや。御らんと申ければ。判官みかたにいつべき仁は誰か有と問給へバ。手だれ共多候中に。下野国の住人。な須の太郎すけ高が子に。与一宗高社。小兵でハ候へ共。手ハきいて候と申。判官証拠が有か。さん候。かけ鳥などを諍て。三に二ハ必ずいをとし候と申ければ。判官さらバ。与一よべとて召れけり。与一其比ハいまだ。廿斗の男也。かちに赤地の錦をもつて。をほくひハだ紬いろへたる。ひたゝれに。もよぎをどしの鎧きて。あし白の太刀をはき。廿四さいたるきりふの矢負うすきりふにたかのはわり合てはいだりける。ぬための鏑をぞ指そへたり。重藤の弓わきにはさミ。甲をバぬいで高ひもにかけ。判官の御前に畏る。判官いかに与市。あの扇のまん中ゐて。敵に見物せさせよかしと

〈2―左〉

宣へバ。与市仕つ共存候はず是をいそんずる物ならバ。ながき御かたの。御弓矢のきづにて候べし。一定仕らうずる仁に。仰付らるべうもや御らんと申けれバ。判官大きにいかつて。今度鎌倉を立て。西国へ向ハんずる者共ハ皆義経が下知をそむくべからず。それ又少しも子細を存ぜん人々ハ。是よりとう〳〵かまくらへ帰らるべしとぞ宣へける。与市重てじせバ悪かりなんとや思ひけん。左候ハヾはづれんをバ存候ハず。御諚で候へバ仕て

社見候ハめとて。御前をまかり立。黒き馬のふとくたくましきに。まろほやすつたる。金ふく輪の鞍置て乗たりけるが。弓取なをし。手綱かいくつて。汀へ向てぞあゆませける。みかたの兵共。与市が後を遥に見送りて此若者一定仕らうずると。覚へ候と申ければ。判官もたのもしげにぞ見給ひける。矢比少しとをかりけれバ。海の中一たん斗打入たりけれ共。猶扇のあハひハ七たん斗も有らんと社見へたりけれ。比ハ二月十八日

〈3—右〉

とりのこく斗の事なるに。をりふし北風はげしう吹ければ。磯打波も高かりけり。舟ハゆり上ゆりすへ。たゞよへバ。扇もくしに定らず。ひらめいたり。沖にハ平家。舟を一面にならべて見物す。くがには源氏。くつバミをならべて是をミるいづれも〳〵晴ならずと云事なし。与市めをふさひで。なむ八幡大ぼさつ。別してハ我国の神明。日光の権現。うつの宮なすのゆぜん大明神願ハくハあの扇の真中いさせて。給せ給へ。是をゐそんずる物ならバ。弓きり折自害して人に二度。面を向ふべからず。今一度本国へ帰さんと思召バ此矢はづさせ給ふなと。心の中にきねんして。めを見ひらいたれば。風も少し吹よハつて。扇もいよげにこそ成たりけれ。与市かぶりを取てつがひ能引て兵とはなつ。小兵といふてう。十二そく三ぶせ。弓ハつよし。かぶらハ浦ひゞく程に長鳴して。あやまたず。扇のかなめぎハ。一寸斗をひて。ひいふつとぞゐ切たる。かぶらハ海に入けれバ扇ハ空

〈3—左〉

ゐぞあがりける春風に。一もミ二もミもまれて。海へさつとぞ散たりける。皆紅ひの扇の。夕日のかゝやくに。白波の上にたゞよい。うきぬ沈ぬゆられけるを。おきにハ平家。舟ばたをたゝいてかんじたり。陸にハ源氏。箙をたゝいてどよめきけり

五　弓ながしの事

余の面白さに。かんにたへずや思ひけん。船の中より。年のよハひ五十斗なる男の。黒皮をどしの鎧きたるが。白元の長刀つえにつき。扇立たる所に立て舞すましたり。いせの三郎義盛。与市が後にあゆませよつて御諚で有ぞ是をも又仕つれと云けれは。与市今度ハ中さし取てつがひ。能引て兵とはなつ。舞すましたる男の。まつたゞ中を兵づハとゐて。舟ぞこへまさかさまにいたをす。ああいたりと云人も有。いや〳〵情なしと云ものも多かりけり。平家の方にハ。しづまりかへつて音もせず。源氏ハ又箙をたゝいてどよめきけり。平家是をほいなしとや思ひけん。弓もつて一人。たてつい

〈4—左〉

て一人。長刀持て一人武者三人渚にあがり。源氏処をよせよやとぞ

まねきける。判官安からぬ事也。馬つよならん若たう共。はせよつて。けちらせと宣へば。武蔵の国の住人。ミをのやの十郎。同き四郎。同き藤七。上野国の住人。丹生の四郎。信濃の国の住人。きその中次。五きつれてをめいてかく。先たてのかげより。ぬりのにくろほろはいだる。大の矢を持てまつ先に進んたる。みをのやの十郎が。馬の左のむなかひつくしをはづのかくる程にぞ。いこうだり。屏風をかへすやうに。馬ハどうどたをるれバ。主ハ弓手の足をこへ。ぬての方ゑをり立て。やがて太刀をぞぬいたりける。又たての陰より。大長刀打ふつてかゝりければ。ミをのやの十郎小太刀大長刀に叶わじとや思ひけん。かいふゑてにけければ。やがてつゞいて。追かけたり。長刀にてながんずるかと見る所に。さハなくして。長刀をバ弓手のわきにかいはさミ。めての手をさしのべて。ミをのやの十郎が。甲のしころをつかまうとす。つかまれじとにぐる三度つかミはづいて。四度のたひにむ

〈5—右〉

ずとつかむ。しバしぞたまつて見えし。はち付の板より。ふつと引きつてぞにげたりける。残り四きハ馬をおしうでかけず。見物してぞいたりける。みをのやの十郎ハ。みかたの馬のかげにげ入て。息つぎゐたり。敵ハをふてもこず。其後甲のしころをバ。長刀の先につらぬき。高く差上。大音声を上て。遠からん者ハ音にも聞。近くハめにも見給へ。是社京童のよふなる。かづさの悪七兵衛。かげ清。にと。名乗捨て味方のたてのかげへぞのきにける。平家是に少し心ちをなをし。悪七兵衛討すな者共。景清討すなつゞけやとて。二百よ人渚にあがり。たてをめんどりばにつきならべ。源氏処をよせよやとそまねきたる。判官安からん事也とて田代の冠者を先にたて。後藤兵衛父子。金子兄弟弓手馬手になし。いせの三郎を後として。判官八十よきをぬいてさきをかけ給へバ。平家の方にハ。馬に乗たる勢ハすくなし。大略かちむしや成ければ。馬にあてられじとや思ひけん。しバしもたまらず。引しりぞき。ミな舟

〈5—左〉

にぞ乗にける。たてハさんをちらしたるやうに。さん〴〵にけちらさる。源氏勝に乗て。馬のふと腹つかる程に。打入〳〵せめ戦ふ。舟の中よりくま手ないがまをもつて。判官の甲のしころに。からり〳〵と打かけ〳〵。二三度しけれ共。みかたの兵共。太刀長刀の先にて。打拂ひ打拂ひ責戦ふ。され共いかゞハし給ひたりけん。判官弓を取をとされぬ。うつぶし。むちをもつてかきよせ。とらん〳〵とし給へバ。味方の兵共只捨させ給へ〳〵と申けれ共。終に取て。笑てぞ帰られける。老共ハ皆つまハじきをして。たとひ千疋万疋にかへさせ給ふべき。御たらしなりと申共。争か御命にハ。かへさせ給ふべきかと申けれバ。判官弓の惜きにもとらバ社。義経が弓といハゞ二人してもはり。もしハ三人してもはり。おぢ為朝などが弓のやうならバ。わざ共をとし

て取すべし。へう弱たる弓を。敵の取もつて。是社源氏の大将軍。九郎義経が弓になど。嘲哢せられんが口惜さに。命にかへて取たるぞかしと宣へバ。皆又是をぞかんじける。一日戦暮し。夜に入けれバ。

〈6—右〉

平家の舟はハ沖にうかミ。源氏ハ陸に打上て。むれ高松の中なる。野山に陣をぞ取たりける。源氏の兵共ハ。此三日が間ハねざりけり。をとゝひ摂津国。渡辺福嶋を出るとて。大風大波にゆられて。まどろまず。きのふあハの国。かつうらに付て軍し。よもすがら中山ごへ今日又一日戦くらしたりけれバ。人も馬も皆つかれはてゝ或ハ甲を枕にし。或ハ鎧の袖。箙などを枕として。ぜんごもしらずぞふしにける。され共其中に。判官といせの三郎ハねざりけり。判官は。高き所に打上て。敵やよすると遠ミし給ふ。いせの三郎ハくぼき所に隠居て。敵よせバまづ。馬の太腹ゐんとて。待かけたり。平家の方にハ。のと殿を大将軍として。其夜ようちにせんとしたくせられたりけれ共。越中の次郎兵衛と。江見の治郎が先陣を諍程に。其にも空く明にけり。寄たりせバ。源氏なかハたまるべき。寄ざりける社。せめての運のきハめなれ

六　志度がつせんの事

〈7—右〉

明けれバ。平家ハ当国しどの浦へこぎしりぞく。判官八十よきしどへ追てぞかけられける。平家是を見て。源氏ハ小勢成けるぞ。中に取こめて討やとて。そ。千よ人渚にあがり。源氏を中に取こめて我討取んとぞ遠ミける。去程に。八嶋に。残りとゞまつたる。二百よきの勢共。をくればせに馳来る。平家是を見て。ありや源氏の大勢のつゞきたるハ。何十万ぎか有らん。取こめられてハ叶べからずとて。引退き皆舟にぞ乗にける。塩にひかれ風にまかせて。いづちをさすともなく。ゆられ行こそ悲しけれ。四国をバ。九郎大夫の判官せめをとされぬ。九国へは入られず。只中有のしゆ生とぞみえし。判官ハしどの浦にをりゐて。首共じつけんしておハしけるが。いせの三郎義盛を召て。あハの民部重能が嫡子。田内左衛門教能。いよの河野の四郎が。めせ共参らぬをせめんとて。其勢三千よきで。いよへこへたりけるが。河野をバ討もらしぬ。家の子郎等百五十人が。首切て。八嶋の内裏へ参らせたるが。けふ是へつくと聞。汝行向て。こしらへて

〈7—左〉

見よと宣へバ。義盛畏り奉つて。白旗一流給て指まゝに。手勢十六き。皆白装束に出立て。馳向ふ。去程に。いせの三郎。田内左衛門行あいたり。あハひ一町斗を隔て。たがひに赤旗白籏打立たり。義盛教能がもとへ使者を立て。且聞し召れてもや候らん。鎌倉殿の御弟。九郎大夫判官殿こそ。平家追討の院宣を奉て。西国へ向ハせ給ひて候。其御内

に。いせの三郎義盛と。申者にて候が。軍合戦のれうで候ハねバ。物の具をも仕り候ハず。弓箭をも帯し候ハず。大将に申べき事有て。是迄罷向て候ぞ。明て入させ給へと云をくりたりければ。三千よきの兵共。皆中をあけてぞ通しける。いせの三郎。田内左衛門に打ならべて云けるは。且聞給ひても候らん。鎌倉殿の御弟。九郎大夫の判官殿こそ。平家追討の為に。是迄向ハせ給ひて候が。一昨日あハの国。勝浦に着て。御辺の伯父。桜ばの介殿討取。昨日八嶋に付て。軍し御所内り皆焼拂ひ。主上ハ海へ入せ給ひぬ。大臣殿父子をバ。生捕にし参らせて候。能登殿も御自害其外の人々ハ。或ハ御じがい

〈8—右〉

或ハ海へ入せ給ふ。よたうの少々残りたるをバ。けさしどの浦にて皆討取候ぬ。御辺の父あハの民部殿ハ。降人に参らせ給ひて候。義盛が預り奉りて候が。あなむざん。田内左衛門教能が。是をバ夢にもしらずして。明日ハ軍して。討れんずる事のむざんさよと。夜もすがら歎き給ふがいたハしさに。告しらせ参らせんが為に。是迄罷向て候ぞ。今ハ軍して討れ給ハん共。又甲をぬぎ。弓の弦をはづし。降人に参て。父を今一度見給ハん共。ともかうも御辺の御はからひぞと云けれバ。田内左衛門且聞事に少もたがハずとて。甲をぬぎ弓の弦をはづして。降人に参る。大将かやうに成うへハ。三千よきの兵共も。皆かくのごとし。義盛がわづか十六きにぐせられて。をめ〳〵と降人に社成にけれ。義盛。田内左衛門を相ぐして。判官の御前に畏て。此由かくと申けれバ。義盛が謀事。今に始ぬ事なれ共。神妙にもしたる者かなとて。やがて田内左衛門をバ。物の具召れて。いせの三郎に預けらる。扨あの兵共ハいかにと宣へハ。遠国の者共ハ誰を誰とり

〈8—左〉

見参らせ候べき。只世の乱を鎮て。国をしろし召れんを。主にし参らせんと申けれバ。判官此義尤然るべしとて。三千よきの兵共を。皆我勢にぞぐせられける。去程に渡辺福嶋。両所に残り留りたりける。二百よ艘の舟共。梶原を先として。同じく廿二日の辰の一天に。八嶋の磯にぞ着にける。四国をバ。九郎判官せめ落されぬ。今は何の用にかあふべき。六日のしやうぶゑにあハぬ花。いさかいはてゝのちぎりきかなとぞ笑れける。判官八嶋へわたり給ひて後住吉の神主。津守の長盛都へ上り。院参して。去ぬる十六日の丑のこく斗。当社第三の神殿より。鏑矢の声出で西をさして。まかり候ぬと。奏聞せられたりけれバ。法皇大きに御かん有て。御けんいげ。種々の神宝を。長盛して。住吉大明神へ参らせらる。昔神功皇后。しんらをせめさせ給ひし時。いせ大神宮より。二神あらみさきをさしそへさせ給ひけり。二神御舟のともへに立て。しんらをやすうせめしたがへさせ給ひけり。ゐ国の軍をしづめさせ給ひて。

〈9―右〉

帰朝の後。一神は摂津国。住吉の郡に。とゞまらせをハします住吉大明神是なり。今一神は。信濃国。すハの郡に跡をたる。すハの大明神の御事也。昔の征伐の事を思し召忘れさせ給ハで。今も朝のをん敵を亡し給ふべきにやと。君も臣もたのもしうぞ思し召れける